

第六回星野立子賞受賞句集

『ひょうろ』 二十五句抄

瀬戸内寂聴

紅葉燃ゆ旅立つ朝の空や寂

おもひ出せぬ夢もどかしく露の臺

生ぜしも死するもひとり柚子湯かな

落籍かされし妓の噂など四日かな

曼荼羅華降る経をあげ庵の春

寂庵に誰のひとすぢ木の葉髪

ペン置けば深夜の身ほとり冴え返る

山新樹法灯不滅天台寺

二河白道駈け抜け往けば彼岸なり

独りとはかくもすがしき雪こんこん

はるさめかなみだかあてなにじみをり

春逝くや鳥もけものもさぶしかる

天地にいのちはひとつ灌仏会

骨片を盗みし夢やもがり笛

雛飾る手の数珠しばしはづしをき

むかしむかしみそかごとありさくらもち

子を捨てしわれに母の日喪のごとく

湯豆腐や天変地異は鍋の外

羅の縮衣の袂に螢拾ひため

鈴虫を梵音と聴く北の寺

釈迦の腑の極彩色に時雨なり

落飾ののち茫茫と雛飾る

火葬炉の鉄扉の奥に虎落笛

御山のひとりに深き花の闇

飯の世の修羅書きすすむ霜夜かな